

第3回 ミドルステージ研修

令和4年11月16日(水)

講演 「こ幼保のより良い連携・接続に向けて」
～さらに、保護者との関係構築を考える+架け橋プログラム～

講師 帝塚山大学 教授 松浦 真理氏

1. グループワーク

・『園と家庭のつながるシート』を自園で作成したものを持参し、グループで共有した。



書いてみたけれど、ちょっと難しかった。

保護者に伝えようとする中で、書き方が変わりました。
保育の中での保育者の思いや「こんな力につながっています」と意識して書くようになりました。

各グループの発表から



(グループワークでの意見)

付箋で成果を見える化する

- ① 変化があった、効果が見られたなどポジティブな点について、できるだけ具体的に記入。(黄色の付箋)
- ② うまく使えなかった、効果がなかったなどについては理由も一緒に記入。(青の付箋)
- ③ その他、自分達で考えたこと、工夫したことなどがあれば記入。(桃色の付箋)

黄色の付箋

- ・保育者の声から保育を見直すことが出来た。
- ・書いてみることで普段の保育や保護者・子どもとのやりとりを見直し分析ができる。
- ・意識してねらいや願い、子どもの変化していくことを発信するようになった。

青色の付箋

- ・保護者の関わりが、想像でしか書けなかった。
- ・全ての保護者に周知することが難しい。一斉で伝えようとすると反応が分かりにくい。個別では会えない保護者に伝えにくい。

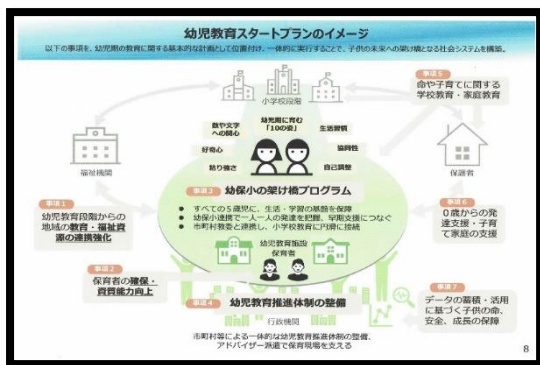
桃色の付箋

- ・具体的に伝えることができ、保護者と保育者の心理的距離が近づいた。
- ・園で子どもが楽しんでいることを家庭でも親子で楽しんでもらえるきっかけになった。
- ・収穫したさつまいものつるを持ち帰り親子で調理した。普段野菜を食べないのに「食べる」と美味しそうに食べたことを保護者が喜んで話してくれた。

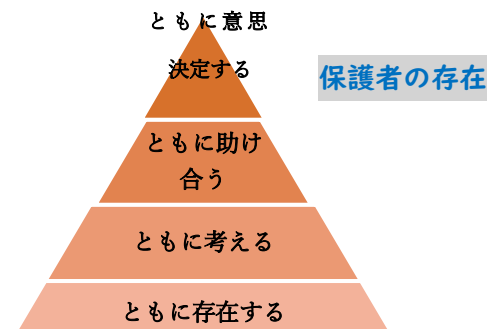
2. 「つながるシート」の原案として参照した東京都港区における活用状況

- 保育所、幼稚園の4分の3で活用されている。
- 家庭で楽しく読めるように「あなたならどうする?」といった問いかけ形式にし、家庭で考えてから、「例えばこうしてみたら?」と提案があったりすると、保護者や小学生の兄弟も一緒に大切なことが共有できる。
- 単純に「家庭と連携」するのが目的ではなく、「小学校とつながること」を念頭に、保育と家庭での子どもの姿がどのようにつながるかなどを保護者に理解していただく必要がある。

3. 「幼保小の架け橋プログラム」



4. 学校や園は、元来「親の子育て」の延長としての機能をもつ



5. 保護者参加型の懇談会の効果的な方法を考える（グループワーク）

（コロナ禍でもあるので、今まで通りの形式でできていない園が多いが…）

- ・和やかな雰囲気、緊張をほぐす遊びを取り入れる。
- ・園からのお願いばかりにならないようにする。
- ・子育ての事や悩みなどを言える場にする。
- ・子どもの写真をパワーポイントにして見せる。
- ・終了後はクラスだよりや手紙、掲示などで参加できなかった保護者にも内容の共有ができるようにする。



○「保護者同士の自然なつながりをつくること」がポイント

- ・準備段階で保護者からの事前アンケートをとって話したいテーマを設定する。
- ・会をもつ時間や長さ、名札（大きめのシールなど）の工夫をする。
- ・会の進行はレジュメやボードに示しておく。
- ・グループワークのルールを最初に明確にする。（話すのが苦手な人は無理強いしない）
- ・終わった後で、（保護者からの意見も踏まえ）フィードバックを返す。また、比較的短い間隔で次の会の日程を決める。

☆ともに子どもをそだてるために保護者と良好な関係を築きましょう！

【参加者の声・気付き】

- ・保育を今まで以上に意識しながら行い、どんな力を今のうちにつけておくべきかを改めて考える事が出来た。
- ・単発的な受講に比べ、1回目を受けた研修の内容に実際に取り組み、その中での気付きや感じたことを意見交換する機会があったので、色んな人の意見を聞くことができ、自分の見方に気付き、学びに繋げることができた。
- ・1回目の研修で学んだことを自分の園の環境、子ども、保護者との連携、保育の中でどのように活かすことができるかを考えて実践し、それを再び研修の中で振り返って学びにつなぐことができた。
- ・同じ講師の先生で研修内容も同じであることで、振り返りながら研修が受けられるだけでなく、自分自身も内容がより理解できると思った。
- ・グループワークが1回目と同じメンバーだったので、和やかな雰囲気話しやすかった。また、前回の内容についても話し合えたことが良かった。